

Title	コロナ禍を踏まえた「新しい現場主義」での科学技術政策の検討結果報告
Author(s)	楠木, 亮介; 中川, 尚志; 竹上, 直也; 岡村, 圭祐; 酒井, 吉彦; 林, 周平; 石原, 瑛暉; 朝倉, 千尋; 梅津, 太紀
Citation	年次学術大会講演要旨集, 35: 733-735
Issue Date	2020-10-31
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/17319
Rights	本著作物は研究・イノベーション学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Research Policy and Innovation Management.
Description	一般講演要旨

コロナ禍を踏まえた「新しい現場主義」での科学技術政策の検討結果報告

○楠木亮介※, 中川尚志, 竹上直也, 岡村圭祐, 酒井吉彦, 林周平, 石原瑛暉, 朝倉千尋, 梅津太紀
(文部科学省)

※rkusunoki@mext.go.jp

1. 政策対話の促進

今般のコロナ禍にあつて、科学技術行政とアカデミア、そして広く世の中との新しい関係性や協働の在り方が盛んに模索されてきた。文部科学省でも「現場に根差した政策立案機能の強化」に向けた様々な取組を進めてきており、特に近年は「現場の様々なステークホルダーとの対話」に力を入れてきた。例えば科学技術政策の検討に当たっては、企業、大学、研究機関の研究者、マネージャー、URA、職員、学生、教育政策では学校、教育委員会、民間事業者、国立教育政策研究所等の公的機関、スポーツ・文化政策では地方自治体、スポーツ・文化団体、アスリート・文化人など、産学官にわたる幅広い関係者の方々から、日々の実態や国際動向、今後目指すべき方向性などについて意見を聴くとともに、行政側からも積極的に発信していくことで双方向コミュニケーションの実践に取り組んでいる。

これまでの枠に留まることのない柔軟で創造的な政策形成アプローチは、Society 5.0 時代や人生100年時代といった多様で変化の激しい時代にあつて益々重要性を増しており、文部科学省としてもこうした「対話型政策形成」のプロセスを通じて、行政官にはない発想や考え方に触れ、学び、実際の政策へ反映させていくことを目指している。これまでも多くの方と政策対話を進めてきたところであり、例えば省外の有識者や民間企業等の方々を招き、政策課題や政策立案手法について検討を深める研修を実施してきたほか、後述の「科学技術ワクワク挑戦チーム」では、産学官の若手の方を中心に100人以上の方々との交流・意見交換を通じて政策対話を重ねてきた。

本学会は政策研究者のみならず、実務家の方々も含む産学官の様々な立場の方々に参加され、幅広い議論が行われる場であることに鑑み、今回の発表では、「新たな現場主義」を目指す科学技術行政の実践とチャレンジについて、省内若手有志職員による最近の活動について紹介する。

2. 令和2年度科学技術改革タスクフォース戦略室報告書概要

文部科学省では、政策的に重要でありながらこれまで十分に検討が進んでいない局横断的な課題について、中長期的な視点の下、若手有志職員が中心となって局課の所掌にとらわれず自由闊達な検討を行う「科学技術ワクワク挑戦チーム」を昨年(2019年)末に設置し、今後の科学技術イノベーション政策とその進め方について検討を行ってきた。社会全体がコロナ禍にあつて研究現場にも多大な影響が出ている中、リモートでの新しいコミュニケーションの形、新しい協働の形も模索しつつ、産学官民の幅広い現場の方々と行政側とが一体となって未来視点での政策対話に取り組んできた結果を、本年8月末に以下の5つのテーマに沿って取りまとめ公表した[1]。

(1) 「博士課程・アカデミアを意欲ある若手が夢を持って活躍できる場に」

- ・いま若い世代にとって、研究の世界は果たして魅力ある活躍の舞台であろうか。博士課程学生の育成・確保を考えるにあたり、これまでの政策議論では、大学院生にまつわる「お金(経済的支援)」や「職(キャリアパス開拓)」に関する問題提起が数多くなされてきたが、それで十分であろうか。

- ・意欲ある学生は先輩や教員の姿等を通じて、行政サイドからは見えづらい研究現場のリアルな実態を感じ取っているのではないか。「お金」や「職」といった観点に加え、「研究環境」の質・魅力を確保することも重要であり、研究指導や研究室運営に係る教員の資質向上とその評価が重要。
- ・あわせて、研究室という閉ざされた空間において、大学院生が狭い価値観に陥らず、心理的な安全性を確保できるような取組及び研究室選びの在り方を検討することが重要。

(2) 「科学技術広報に「ワクワク」の視点で新たな創造性と付加価値を」

- ・科学技術及びその政策にまつわる広報の大切さは、多くの職員が日々の業務の中で痛感しつつも、なかなか効果的な打ち出しには至らず、これまで有効な手立てを講じられていないのではないか。
- ・日本の将来を担う科学技術人材層を厚くするためには、科学の魅力に目を向けてもらえる泥臭い努力をしていくこと、既に多くの魅力的な遊びに囲まれているいまの若者たちから、ほんの5分間だけでも時間をもらって耳を傾けてもらえるような伝え方ができること、そのような人材を養成していくことが重要。
- ・「科学技術×文化芸術」や文理融合により、より訴求力の高い広報につなげていけないか。新しい科学技術や芸術の価値が相乗的に創造されていく仕掛けを行政サイドから提案していけないか。

(3) 「地域の科学技術（ヒト・アイデア）を日本の強みに・魅力に・成長基盤に」

- ・「金の切れ目が縁の切れ目」となることなく、大学発の研究成果を持続的に地域活性化につなげていくための新たな施策提案ができないか。コロナ禍による大きな状況変化もある中、今後の時代を先導する「地域科学技術イノベーション」政策とはいかにあるべきか。
- ・コロナ禍（“一極集中から分散へ”）における地域の遠さが障害でなくなる時宜を捉えた施策として、「イノベーション・バウチャー」（事前購入型で使用目的の指定された「バウチャー」を活用し、企業は大学の研究者を選択、大学側は資金獲得を目的に競争する仕組み。政策目的の実現のため支給される補助金に、市場の特性である「選択」と「競争」の要素を加える手段として機能）制度を提案。あわせて、新たに研究情報に関するビックデータをAI等も導入していくことでマッチングの高度化・効率化を図れないか。

(4) 「知恵を持ち寄りともに乗り切る：コロナ禍の研究現場」

- ・コロナ禍の研究現場の厳しい状況に関する先行調査から浮かび上がった各種課題について、そのような困難に立ち向かっている現場から先行的な知見やノウハウを得ること、そしてそれを効果的に横展開していくことを目的としたWebアンケート形式の独自調査を実施。
- ・調査結果からは、多くの研究現場が苦境にありながらも、様々な現場努力や横の協力を通じて乗り越えつつある様子が多くの具体的事例やエピソードとともに浮かび上がり、これまでの先行調査を補完する有用な現場知見が得られた。

(5) 「いまこそ新しい発想で未来型の研究システムへ」

- ・オープンサイエンスの潮流に今般のコロナ禍が加わり、デジタルトランスフォーメーション（DX）等に伴う研究インフラの高度化が急速に進む中、研究活動における実験等のフィジカルワークに相当する部分を従来のアカデミアの輪郭の外へとアウトソースすることで、新たな研究主体が参画・活躍する「拡張されたアカデミア」の外縁を描いていくべき時機ではないか。これを効果的に機能させ、従来の研究活動の様式を革新していくことで、新たなアカデミアのエコシステムの実現につなげていけないか。

3. 今後の方向性

文部科学省では、今後とも産学官の幅広いセクターの方々との政策対話を継続していく中で、個々の職員が実務家としての面も持ちつつ積極的に政策を世に問い発信していくことを目指している。今回紹介させていただく報告書の内容についても、ぜひ皆様方からのコメント・フィードバックをお寄せいただければ幸いである。加えて、本報告書の内容に限らず、科学技術の力で世の中をより良いものとしていくためのアイデア、産学官の新しい協働の形、新しい現場主義の在り方などについて、下記 QR コードのアンケートにご協力いただき、ぜひ忌憚のないご意見をいただければ幸いである。引き続き、本学会の皆様方と文部科学省職員との間で未来志向の政策検討とその実装に向けた議論を継続していきたい、本学会発表の場もそのための重要な政策プラットフォームとして活かしていきたい。



※アンケートフォームへのリンク

参考文献

- [1] 令和2年度 科学技術改革タスクフォース戦略室 報告 —「科学技術ワクワク挑戦チーム」からの提案—「ともに創り、ともに未来へ：新しい発想で先導する科学技術行政と共創の形」
https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/2020/1417045_00004.html